

小波南洋魚青とその一門および交友の画人

京都四条派の小波魚青は、多くの門人を持つ。よく知られた画家として小波魚江、萩原魚仙がいる。他に表具師の高島直次郎星江（号魚雪）、高島星次青芳親子、鹿児島寄留時代の阪本宗助鶴城、岩戸神社の天井画を共に描いた青山、青阪、青光などが門人として名を連ねる。また、交友があった画家として西村草文がいる。

こなみぎよせい

小波魚青 (1844～1918)

長崎の郷土画家。通称が南洋で実名は盛春。魚青の他に月華、夏風庵、清風居、月柳など数号を持つ。宇和島伊達藩主の側臣家に生まれる。画の作法は円山応挙、呉春と続く京都四条派の流れで、梶谷南海、長谷川玉峰に師事する。また、俳諧を当時第一人者であった東京の月之本(関)為山に学ぶ。

魚青は、京都、大阪、東京、近江、土佐などを歴遊し、鹿児島に寄留するなど九州をめぐる後長崎に居を定めて活動し、弟子を育てながら多くの作品を残す。



小波魚青

明治15年秋、39歳のときに、初めて行われた官設内国絵画共進会で1等賞を受賞するのを始めとして、各地の同共進会及び品評会に10回出品し、1等賞を含め8回受賞する。明治24年5月にロシア皇太子、ギリシア国親王が来日した時、長崎県知事官邸で席画を行い、褒賞を受ける。明治25年10月及び27年10月に日本美術協会出品の猿の絵が2度宮内庁に買い上げられる。

現存する代表的な作品に、長崎県美術館所蔵の楓鹿松鶴図屏風（六曲一双すなわち6つに折れる屏風2枚組）がある。また当時、長崎市麴屋町で使用されて評判が高かった傘鉾かさほこの絵を担当し、同市内若宮神社内の岩戸神社の天井絵を弟子達とともに描画する。長崎市諏訪神社所蔵の暁遠望景図は長崎くんちの祭で時折展示される。大河平屋敷絵図は宮崎県えびの市の有形文化財となっている。長崎市伊良林52番地において75歳で没。



魚青「孔雀」掛軸絹本
169.3cm × 85.5cm

こ なみぎょこう

小波魚江 (1876～1940)

本名小波胤雄^{たねお}。魚青の長男として長崎に生れて、父に師事し、後に諫早に移住する。作品には、「虎の図」、「軍鶏^{しやも}」といった四条派の特徴であり魚青も得意とした毛描きの花鳥画と、軽妙な線で描かれた僧の図などがある。作品「鷺の絵」が魚青同様に宮内庁に買い上げられたと伝えられる。東洋研美協会発行の「日本現代画伯名鑑」第10版(昭和5年)には、その特別大家席に名が挙げられている。魚江は茶道、華道にも通じ、諫早高等女学校や長崎県立農学校などの式花を手掛けている。



魚江作「軍鶏」掛軸絹本、部分

はぎわらぎよせん

萩原魚仙 (1873～1942)

長崎市丸山町で生まれ、四条派の小波魚青の指導で画家となる。長崎くんちの傘鉾のさがり「さんごと魚譜」の絵は有名。「今籠町崇福寺内に住み、特に鯛^{たい}の絵に巧みであった。万屋町吉宗^{よっそう}の所蔵である魚づくしの絵は魚仙の傑作の一つである。神戸で没。大正元年から4年にかけて、グラバーの長男倉場富三郎が発行した魚譜「日本西部及び南部魚類図譜」を手がける。これは、明治末から昭和初期の約20年間に、長崎在住の日本画家が描いた801(805とも)枚の絵からなる魚貝類図譜である。魚仙はこのうち約200枚を担当する。平成17年には長崎大学水産学部が監修してグラバー魚譜200選が刊行された。

にしむらそうぶん

西村草文 (1869～1940)

本名久保 芳^{くぼ よし}。山口県玖珂郡愛宕町に生まれる。博多市の住職西村氏の婿養子となり、以来、画号を草文とする。日本画を四条派の流れを汲む谷 文晁の筆意に感じ、後に久保田米僊に師事する。後、能楽画を志して全国各地を遍歴しながら梅若派など各派に学び、大正10年以降長崎に定住する。堂号を三星館と称する。軽妙な筆勢で柔らかさ・堅さ・鋭さを表現する。また、書と一体となったスピードとリズム感は水墨画をはじめ、作品の随所に表れている。構図は黄金分割^{あいら}をとり空間の美は、絵のもつ深みや広がり^{あいら}を表現している。鹿児島県始良市北山には、草文の作品を中心に収めた平成10年創設の草文館がある。魚青と交友があった。

森の美術館 in 雲仙 長崎県雲仙市小浜町雲仙380

雲仙よか湯併設

TEL 0957(73)3482

資料は小波盛佳著「画人小波南洋魚青」刊行予定本より抜粋